

## 特集にあたって

本会も創立二〇年の記念事業を終え、新たな研究段階を迎えている。「原史を学ぶ会」幕末開港編では「新訂臼井家文書」第四巻を讀み終え、一〇月例会からは刊行されたばかりの「新横須賀市史」資料編・近世Ⅰの学習に入った。また明治・大正編では「佐久間権蔵日記」の二冊目、第四巻（大正五年）も半ばを過ぎた。しかし年報第一二号での特集「幕末海防と三浦半島」のような研究成果のまめめは、浦賀奉行所関係や佐久間・鶴見関係では未だなまじきでない。

こうした状況の打開にもなればと、会報担当から「会報」での連載企画から「年報」での特集掲載へという提案がなされたのが第二三回総会の場においてであった。当初案としては、現在の混沌とした世界、政治、地域の状況を読み解くための問題提起を行うとして、かつて会報で試みた各自が自由に選ぶ書目の書評と、明治維新史学会などを中心として新たな研究が精力的に進められている幕末維新期の研究基盤となる雑誌論文を集めた「幕末維新論集」の書評であった。決定は二月の事務局会議に持ち越され、書評対象として新たに「日本の時代史」（吉川弘文館）が浮上した。確かに基礎を確認することも大切ではあるが、最新の研究状況を把握する方向に大勢は傾いたようである。論文集自体は、編者による基調論文と数人による各論から成っているが、必ずしも首尾一貫した構成とはなっていない、という批判はあった。しかし、全論文について論評する必要はなく、各自の問題関心に沿って持論を展開してもいいだろう、ということを取り組むこととなった。

並行して「春の集中研究会」のテキストとして挙げられた書目が二冊とも絶版となり入手困難であることが分かり、三月の事務局会

議で急遽、「日本の時代史」第二〇巻「開国と幕末の動乱」を取り上げることとした。その記録を会報に掲載し、連載企画第一号とすることも目論んでのことであった。他巻の執筆は八月中にし、九月以降の会報に順次掲載、ということになるが、年報への入稿は一月中にならうから、会報掲載前に年報原稿が完成していなければならぬ。変則的ではあるが、年報への掲載は各巻、見開き二ページ程度と制約を加えたため、会報掲載分から若干縮める必要があったり、逆に年報に書けなかったことを会報でより自由に論ずることもできることとなる。以下に各巻の会報掲載号を示しておくので、参照して頂ければ幸いである。尚、諸事情により入稿が間に合わなかったり、会報掲載を見合わせた巻もあることをお断りしておく。

また二巻の編者新井勝紘氏には、二〇〇五年一月に二〇周年記念事業として、「自由民権運動の再考—民権二二〇周年を迎えて新しい切り口が見えるか—」と題する講演をお願いした。内容は「年報」第一八号に、記録（惣田）は「会報」第二四〇号に掲載されているので併読されたい。

（文責 伊東富昭）

巻数	書名	編者	刊行年月日	担当者	会報
20	開国と幕末の動乱	井上 勲	二〇〇四・二・二〇	鈴木由子	262
21	明治維新と文明開化	松尾正人	二〇〇四・二・二〇	神谷大介	
22	自由民権と近代社会	新井勝紘	二〇〇四・三・二〇	大湖賢一	
23	アジアの帝国国家	小風秀雅	二〇〇四・四・二〇		
24	大正社会と改造の潮流	季武嘉也	二〇〇四・五・二〇	内田修道	
25	大日本帝国の崩壊	山室建徳	二〇〇四・六・二〇	伊東富昭	266
26	戦後改革と逆コース	吉田 裕	二〇〇四・七・二〇	青山文久	
27	高度成長と企業社会	渡辺 治	二〇〇四・八・二〇	惣田 充	267
28	岐路に立つ日本	後藤道夫	二〇〇四・九・二〇	青山永久	265